令和５年１月２７日

第４回学校評議員会報告

本日、早稲田大学教職大学院教授の三村隆男教授にもお越しいただき、学校関係者評価委員会を開催いたしました。今年度の、「学校評価アンケートの結果」と「自己評価」をご説明申し上げ、以下のとおり、評議員の皆様からご意見、そして三村教授からご指導・ご助言をいただきました。

評議委員の皆様より

〇「児童・生徒理解」の項目について、保護者は学校内のことをよく理解していないので「よくあてはまる」には〇を付けづらいのではないか。「ややあてはまる」あるいは「よく分からない」にしてしまうと思う。中学生になると、子どもが家で学校のことを話していないから分からないのだと思う。

〇「個に応じた指導」や「学校図書館の活用」の項目も保護者は分からない。タブレットなら「使っているんだろうな」とは思う。

〇「教育相談」の項目も、保護者にとっては、そもそもどんなことをやっているか分からないから「よく分からない」の数が多くなっているのだと思う。

〇「人間関係づくり」の項目では、学校行事を楽しんでやっている我が子を見るので「あてはまる」に〇を付けるのだろう。

〇「相談への対応」の項目で、子どもの「よく分からない」の数が多いのは、自分が先生に相談していないからだと思う。

〇「地域との連携」の項目では、汐入まつりなどであれだけの人数がボランティアで参加していたのに、当日の天候のため活動ができず、「やった感」がなかったからあまり伸びなかったのではないだろうか。

〇「情報発信」についてだが、小学校ではスクリレを活用しているため、いろいろな便りを見ることができる。紙だとお母さんで止まってしまって父親には回ってこない。

〇校内ハローワークはとても良い行事である。子どもが、将来、こんなふうになりたいと思えるのではないか。ブースによっては、子どもたちがたくさん質問していてとても良かった。希望じゃない職業の話を聞けるのも良い。

〇保護者にとっては、このアンケートはいつも悩む。保護者よりも子どもの結果の方が信憑性があるのではないか。

三村教授より

〇実習生が本校で世話になっている。

〇去年も評価シートを見せてもらったが、着々と頑張っているなと思っている。

〇文科省と一緒にカリフォルニア州を訪れたことがあるが、すべての高校の様々なデータが公表されており、州の中で「この高校のデータは危険だ」「この高校のデータは優秀だ」というのが分かる。これからは学校データが求められるようになる。

〇この評価シートも学校データの一つである。今回は、昨年と比較しているのが良い。

〇「学校図書館の活用」の項目が低かったが、これにより教員はどうすれば良いかと努力するようになる。そして、再びデータを取ることにより「やれば変わる」ということが実感でき学校改革が進んでいく。

〇「児童・生徒理解」の項目一つをとっても、子どもへの聞き方と、教員への聞き方、そして保護者への聞き方が違うので、単純に比較することはできない。質問文を精査する必要がある。子どもが主体なので、子ども中心に見ていくことが大切である。

〇コロナによりトラウマがじわじわときている。それにより「うつ」や「自殺」が増えている。Ⅰ型のトラウマというのは災害に遭ったり事故を目撃したりなど、はっきりとした原因があり本人の自覚もあるが、Ⅱ型のトラウマというのは恒常的な圧力などによるものなのではっきりとした原因が分からず、本人の自覚もないのが怖いところである。このことが、データに影響していることも考えられ、何に努力したらいいのか考え実践し、データがどのように変化していくのか見ていく必要がある。
〇キャリア教育は学力の向上と明らかな関係があり重要な教育である。キャリア教育で必要なのは情報の量である。例えば、家で親から何かの職業について話しを聞いただけでは十分ではない。その後にそれについて本で調べたりすることにより記憶にとどまる。だから、本校の校内ハローワークのように事前学習をしながら、３年間継続してたくさんの情報を収集するということは大変有意義なことなのである。
〇来年も今年と比較をしてもらいたい。
〇十分に説明責任を果たしていると思う。